

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12177

研究課題名（和文）現象学における「存在の根拠としての言語」概念の系譜と主体性の言語的基盤の解明

研究課題名（英文）The study of genealogy of language as the ground of Being in phenomenology and linguistic foundation of subjectivity

研究代表者

景山 洋平（KAGEYAMA, Yohei）

関西学院大学・文学部・准教授

研究者番号：50780376

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、一般に「語り得ぬもの」と呼ばれている主体性の存在（実存）と一般存在論の主題である存在一般について、広義の現象学的存在論の系譜に着目しながら、その言語的な成立基盤を研究してきた。また、特に主体性の存在について、その言語的基盤を明らかにすることがもつ倫理学上の意義についても研究した。この作業に取り組むことにより、20世紀の現象学的存在論におけるロゴス概念の理論的意義を明らかにし、また、特に近代日本における存在論とその主体性がもつ特質を明らかにする基盤を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第一に、従来、それ以上に遡行できないプリミティブな事実としてとらえられがちだった現象学的存在論の事実性について、この事実性において前提されるより先なるものを考察する可能性を体系的に示したことにある。第二に、こうして一人称的経験の基盤をより深く掘り下げることによって、ひるがえって、私たちが他者とともな構成する社会を、そしてこの社会に根ざして生きる人間性のありかたを考察するより普遍的な視点を構築し、これを近代日本の事例に即して具体的に考察したことである。

研究成果の概要（英文）：In this research, I have studied being of subjectivity (existence), and Being in general, which is the subject of general ontology, while these themes are generally referred to as "the unspeakable". Thereby, I focused on the genealogy of phenomenological ontology in a broad sense. I have also studied the significance in ethics of clarifying the linguistic ground of being of subjectivity in particular. Through this work, I have clarified the theoretical significance of the concept of logos in 20th century phenomenological ontology, and have laid the foundation for clarifying the characteristics of ontology and its subjectivity, especially in modern Japan.

研究分野：哲学

キーワード：現象学 人間学 言語 実存 存在 哲学

1. 研究開始当初の背景

フッサールやハイデガーを端緒とする現象学的存在論は、概念分析に定位する分析哲学的な存在論と主体を排去する思弁的存在論の両者としばしば対比される。この対比の核心は実在の理解における言語の意味作用の位置である。現象学的存在論は、分析哲学的な存在論からみると、一人称的経験という心理学的事象を不必要に重視している。反対に、思弁的存在論からみると、記述の媒体として言語を重視することで主体の存在に不当な重要性を与えている。言語概念の位置をめぐるこうした相違はそれぞれの哲学の理論面と実践的含意に影響を与える。

本研究を始めるにあたって、研究代表者は、特に現象学的な存在概念に対する言語概念の構成的意義に焦点をあてることで、21世紀における存在論のこうした対立状況を俯瞰的に理解する視座を確立することを目指した。現象学的存在論における言語概念の位置そのものは早くから先行研究の関心対象となったが、存在概念に対する言語概念の構成的意義という核心的論点をめぐる理論研究は国際的にまだ進められていない。そのため、この点に焦点をあてて現象学的存在論の特質を明らかにすることで、存在論研究における以上の対立の本質を明確化し、各立場を調停するための展望をひらく有益な研究となると考えた。また、この課題は、哲学的意義を持つだけでなく、主体の存在を再検討させることで、今日の倫理学や政治思想における対立軸を考察するメタ的視点を与えて、これにより今日の論争状況に新しい展望を開くためにも有益であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、現象学的存在論の存在概念に対する言語の構成的意義に焦点を当てて、20世紀前半から今世紀までの現象学的存在論における言語論の系譜と、現代の現象学的倫理学における主体概念に対する言語の存在論的意義を解明することを目的とした。現象学的存在論における言語概念の重要性は従来から認識されたが、現象学的な存在概念が言語的記述をのがれる「語りえぬもの」であることから、言語概念の適切な位置づけが行われず、また、主体性と言語の関係も十分に解明されなかった。本研究は、存在に対する言語の構成的意義に着目することで、現象学的存在論の基盤としての言語概念の意義を明らかにすることを目指した。

より具体的にいうと、本研究では、現象学的な存在概念の構成的条件としての「言語」の解明を核心的問いとして、これを軸に、ハイデガーから現代にいたる現象学的存在論の展開を統合的に検討し論点整理を行った上で、言語概念があたえる視座から主体概念を再検討するための展望を示すことを目的とした。第一に、これまでの現象学的存在論関連の哲学史研究を踏まえ、言語概念の体系的位置に焦点をあてた通史的検討をおこなった。第二に、それによって抽出された論点を踏まえて、現象学的倫理学と関連領域における主体概念の存在論的基盤を検討し、今後の課題と展望を示すことを目指した。

3. 研究の方法

上述の研究目的を達成するために、哲学史的研究に関して、第一に、20世紀前半、20世紀後半、21世紀の三つの時期を区別し、現象学的存在論に関する従来の研究を踏まえながら、言語概念の構成的意義を主眼とする研究をおこなうことにより、現象学的存在論の存在論としての特質と可能性を明らかにすることを目指した。それによって得られた論点を前提として、

第二に、現象学的倫理学や関連領域における主体概念に対する言語論の意義について、理論的・実践的含意を明確にし、今後の課題と展望を示すことを目指した。この四点は次のようにまとめられる。

20世紀前半のハイデガーを中心とした現象学的存在論における言語概念の研究

ハイデガー、フッサール、ベッカー、シャップなど現象学的存在論における言語概念を対象として文献研究を行った。また、このテーマに関する国内外の先行研究や歴史的資料を網羅的に収集し、哲学史的布置の図式化と論点整理を行った。

20世紀後半のフランス現象学と哲学的解釈学における言語概念の研究

レヴィナスやアンリのフランス現象学とガダマーの哲学的解釈学における言語概念を、特にハイデガーに対する関係に焦点を当てて精読し、その論点と現象学的存在論としての意義を整理した。と同様に先行研究と歴史的資料の収集・分析を行った。

21世紀の現象学的形而上学とその批判者における言語概念の研究

フランクやテンゲイの現象学的形而上学における言語論を分析し、マルクス・ガブリエルなど現象学的存在論の批判者との対比で、特に様相の形而上学の議論構造に焦点をあてて論点整理した。と同様に先行研究と歴史的資料の収集・分析を行った。

現象学的倫理学と関連領域における主体概念に対する言語論の意義の研究

以上の研究によって明らかとなった言語概念の存在論的意義をふまえて、ジェンダーなど主

体の真正性が問題となるテーマにおける論争を念頭に置きながら、倫理学上の主体概念に対する現象学的な言語概念の含意とインパクトを検討した。

4. 研究成果

2018年度は、特に上記の ① の点について、現象学的観点から言語論と存在論の連関を研究した。その成果として、招待論文「精神と現存在の差異：ガブリエルとハイデガーにおける様相・歴史・自由」(『現代思想』2018年9月)では、マルクス・ガブリエルのハイデガー批判を批判的に検討し、両者の様相概念の存在論的意義を明確化したうえで、そこから両者が言語論の形で導き出す人間観を比較した。また、招待講演「Mensch als logos und sein Ding: ein Versuch」(Colloque international <Heidegger dans la pensee francaise> 2018年10月27日 同志社大学)では、特に後期ハイデガーのロゴス概念に焦点を当てて、ロゴスとしての言語が、ハイデガー存在論の体系全体を形式的に包摂する事象であることを明らかにし、さらに、これが質料的な存在者に適用された場合の理論的意義について検討した。以上の研究成果により、現象学的存在論の基盤をなすものとして言語概念を位置づける道筋が確立された。また、海外の研究者の共同研究として、西田幾多郎の世界概念について現象学的観点から考察する中で、最晩年の西田の宗教論に、本研究の主題である言語論と存在論の連関を見いだした。

2019年度は、特に上記の ② の点について、形而上学的な言語概念と主体性の関係性に特に焦点をあてて研究を進めた。具体的には、言語的対話の発見機能を基盤として、現象学的存在論の体系構造と、主体性をめぐる倫理的問題を再構成する作業に従事した。

前者の成果については、哲学の基本論点の解明として一般社会に広く共有されるように工夫して公開することを試みた。具体的には、第一に、対話の発見機能の存在論的意義を、西洋哲学史の文脈において、歴史的・体系的に考察した。第二に、一般形而上学における存在論と神学の二重性と、存在論における範疇概念を、対話の発見機能の観点から再解釈することを試みた。第三に、21世紀において展開されている実在論の諸潮流について、特にマルクス・ガブリエルに焦点をあてながら、その理論的困難の解決策を提示するとともに、その解決策の根幹となるものが対話の発見機能であることを考察した。第四に、主体性をめぐる理論哲学上の諸論点(相互主観性、受動性と能動性、誕生と死)について、対話の発見機能を基盤として再解釈した。

後者の成果については、現代倫理学における「境界」の問題圏に対する言語的対話の発見機能の意義に焦点をあてて、研究を進めた。これについて、上記した現象学的存在論の体系構造における主体性の位置をふまえつつ、倫理的規範を共有する共同体の「境界」に対する対話の発見機能の構成的意義を明らかにした。その成果は"The Place and Authenticity of Humans in Facticity"としてボン大学のシンポジウム(2019年6月6日)で発表され、分担執筆の著書Nature, Technology, Metaphysics (よはく舎)の一章として刊行予定である。

最終年度の2020年度では、特に上記の ③ の点について、近代日本哲学における存在論と論理の関係性を、また、この関係性における主体の複数性の問題を研究した。第一の成果として、京都学派の西田幾多郎における「世界」と「行為的直観」と「神」の概念について21世紀の現代現象学の観点から解釈し、現代現象学に対して西田哲学が持つ理論的関係を明らかにし、特にハイデガーとの関係で西田が持つ文明論的特徴を示した。これは、"Kitaro Nishida -Das Weltproblem im Verhaeltnis zur Phaenomenologie" (Keiling, Tobias (ed.). Phaenomenologische Metaphysik. Siebeck. 2020. 84-93.)として発表された。第二の成果は、西田幾多郎の後期哲学における論理学と主体性について、「無位真人」の概念に着目しながらその理論的意義を明らかにし、これが後期ハイデガーの人間論に対して持つ独自性を示した。これは口頭発表「西田幾多郎と無位真人の世界 - 後期ハイデガーの人間概念を背景として」(哲学会. 2020年11月1日)として公にされた。第三の成果として、日本における現象学の受容を特に視野に入れて、明治以降の西洋哲学受容における弁証法と主体性の連関を研究した。その成果は、口頭発表「日本のハイデガー受容における弁証法 - 田辺元の思想形成に即して」(国際日本文化研究センター「東アジアにおける哲学の生成と展開」. 2020年8月28日)と口頭発表「Historical Horizon of the Heidegger-Reception in Japan and its ontological significance: Two genealogies, Seishiro Oe and Today」として公にされた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 景山洋平	4. 巻 46
2. 論文標題 精神と現存在の差異：ガブリエルとハイデガーにおける様相・歴史・自由	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 253-266
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 景山洋平
2. 発表標題 日本のハイデガー受容における弁証法 - 田辺元の思想形成に即して
3. 学会等名 国際日本文化研究センター「東アジアにおける哲学の生成と展開」研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 景山洋平
2. 発表標題 西田幾多郎と無位真人の世界 - 後期ハイデガーの人間概念を背景として
3. 学会等名 哲学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kageyama, Yohei
2. 発表標題 Historical Horizon of the Heidegger-Reception in Japan and its ontological significance: Two genealogies, Seishiro Oe and Today
3. 学会等名 Receptions of Heidegger's Philosophy in China and Japan（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kageyama, Yohei
2. 発表標題 The Place and Authenticity of Humans in Facticity
3. 学会等名 Nature, Technology, Metaphysics (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kageyama, Yohei
2. 発表標題 Mensch als logos und sein Ding: ein Versuch
3. 学会等名 Colloque international <Heidegger dans la pensee francaise> (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Keiling, Tobias. Thomas, Arnold. Diego, D'Angelo. Giovanna, Caruso. Mette Lebech. Kageyama, Yohei. Geitsch, Peter. Gutschmidt, Rico. Schmidt, Stefan. Erhard, Christopher. Schlitte, Annika. Neuber, Simone. Lehmann, Sandra. Summa, Michela. Ziegler, Robert. Hauck, Christian. Jean, Gregori.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Mohr Siebeck	5. 総ページ数 418
3. 書名 Phanomenologische Metaphysik: Konturen Eines Problems Seit Husserl	

1. 著者名 大嶋伸雄., 景山洋平. 中本久之. 高橋章郎. 山本正浩. 稲熊成憲. 生須義久. 岩切良太. 小林隆司. Taylor, Renee. 岡本利子. 竹内幸子. 下岡隆之. 中澤紀子. 谷村厚子. 丸達也. 萱野幸治. 清水拓人. 中村彩. 宮原智子. 許山勝弘.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三輪書店	5. 総ページ数 352
3. 書名 作業療法カウンセリング	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	University of Bonn			
ドイツ	フライブルク大学			